

平成29年度

# 学校改善支援プラン

## 第一部 平成28年度全国学力・学習状況調査の結果分析

- \* I 全体的な分析
- \* II 各教科の分析

## 第二部 秋田の探究型授業を充実させる取組

- \* III 探究型授業に関する分析
- \* IV 成果につながる取組
- \* V 検証改善委員からの提言

委員長に阿部昇氏(秋田大学大学院教育学研究科教授)、外部委員に大杉住子氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長)を迎え、秋田の探究型の授業づくりを視点とした改善の方向性を提案

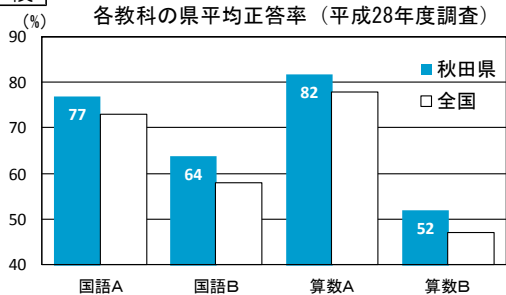
秋田県検証改善委員会

# I 全体的な分析

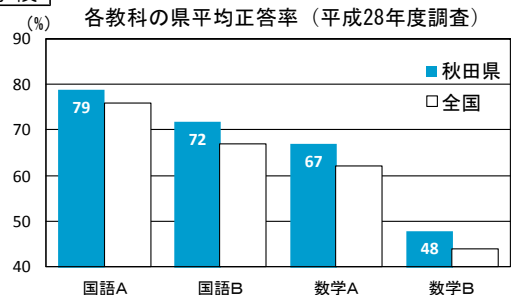
## 教科に関する調査の結果

○各教科の平均正答率は、全国平均をほぼ4ポイント以上上回っており、良好な状況であるといえます。  
 ○記述式の問題における無解答率の平均は、小・中学校ともに、全国平均率を6ポイント以上下回っています。

### 小学校



### 中学校



県平均正答率の4年間の推移

年度	国語A	国語B	算数A	算数B	理科
H28	77 (+4)	64 (+6)	82 (+4)	52 (+5)	
H27	76.0 (+6.0)	76.4 (+11.0)	81.2 (+6.0)	51.5 (+6.5)	66.7 (+5.9)
H26	77.4 (+4.5)	67.3 (+11.8)	85.1 (+7.0)	66.2 (+8.0)	
H25	71.7 (+9.0)	59.1 (+9.7)	82.8 (+5.6)	67.1 (+8.7)	

県平均正答率の4年間の推移

年度	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
H28	79 (+3)	72 (+5)	67 (+5)	48 (+4)	
H27	80.8 (+5.0)	70.7 (+4.9)	68.4 (+4.0)	46.9 (+5.3)	59.6 (+6.6)
H26	84.4 (+5.0)	55.8 (+4.8)	73.0 (+5.6)	65.5 (+5.7)	
H25	81.9 (+5.5)	74.6 (+7.2)	68.9 (+5.2)	47.5 (+6.0)	

※（ ）内の数値は全国平均正答率との比較を表しています。  
 ※平成28年度の平均正答率は、文部科学省から整数で公表されています。

## 児童生徒質問紙調査の結果

※肯定的な回答…「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」等

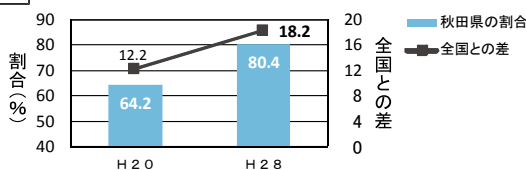
○全体的に肯定的な回答の割合が高く、望ましい生活習慣・学習習慣が定着している状況が見られます。

- 「朝食を毎日食べている」 (小97.0, 中96.7)
- 「友達の話や意見を最後まで聞くことができる」 (小95.9, 中96.5)
- 「毎日同じくらいの時刻に起きている」 (小93.3, 中94.7)
- 「学校のきまり（規則）を守っている」 (小95.0, 中97.3)
- 「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある」 (小93.8, 中92.1)

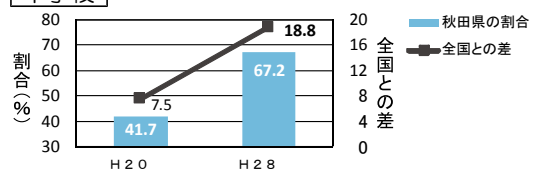
○家庭での学習習慣に関する質問項目からは、児童生徒が自分で計画を立てて学習に取り組んでいる様子がうかがわれます。この質問項目に対する肯定的な回答の割合は、平成20年度に比べて大きく上昇していることから、児童生徒に対して各学校が意図的・計画的に指導を進めてきたことが分かります。

### 「家で、自分で計画を立てて勉強をしているか」（肯定的な回答の割合）

#### 小学校



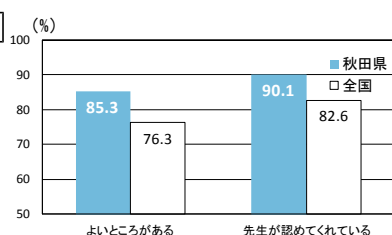
#### 中学校



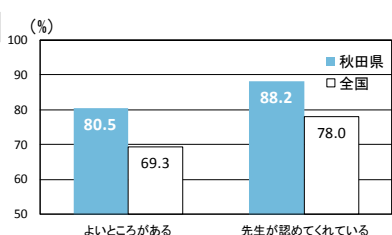
○「自分にはよいところがある」という自己肯定感の意識が高い様子がうかがわれます。これは、学校や家庭等において一人一人の長所や得意なことを認め、更に伸長が図られるような励ましがなされていることが背景にあると考えられます。このような環境の下では、学習に取り組む意欲の高まりが期待できます。

### 「自分にはよいところがあるか」「先生は、自分のよいところを認めてくれているか」（肯定的な回答の割合）

#### 小学校



#### 中学校



## Ⅱ 各教科の分析

### ◇国語

#### 成果

##### 教科

平均正答率は、小学校では4ポイント以上、中学校では3ポイント以上、全国平均を上回っている。平均正答率の全国平均との差は、小・中学校ともにA問題よりもB問題の方が大きい傾向にある。

##### 質問紙

児童生徒質問紙の「国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している」ことに対する肯定的な回答は、小学校では13.5ポイント、中学校では17.7ポイント全国平均を上回っている。

##### 設問例

【小・B3三】目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読む。[全国比 +11.3]

【中・B3三】本や文章などから必要な情報を読み取り、根拠を明確にして自分の考えを書く。[全国比 +11.2]

#### 課題

##### 小学校

▲図表やグラフを基に、文章と関係付けながら、情報を正しく読み取ったり、分かったことを的確に書いたりすること

【小・B2一】「早寝早起き」活動の成果について、グラフを基に書いた内容として適切なものを選択する。  
[正答率 県：45.3%，全国：43.4%]

##### 中学校

▲文章と図表やグラフ、写真等の資料との関連について考え、文章全体の構成を捉えること

【中・B2一】宇宙エレベーターについて取り上げた雑誌の記事の説明として適切なものを選び、文章の構成を捉えて選択する。  
[正答率 県：68.3%，全国：64.9%]

#### 改善に向けて

- ◇図表やグラフが何のために使われているのかを、文章から読み取って理解する学習
- ◇図表やグラフ中の言葉の意味を正確に読み取る学習
- ◇関わる部分の直前の文章だけでなく、全体の文脈を広く読む学習
- ◇読み取った内容が正しく伝わるかどうかを検討し合う学習

- ◇文章の要旨を大きく捉え、それを「課題」「利点」等の別の言葉で言い換えて説明する学習
- ◇文章が図の解説になっているなど、文章と図表等との関連を考える学習
- ◇図表等の効果的な使い方を考えた上で、説明や記録の文章を書く学習

### ◇算数・数学

#### 成果

##### 教科

平均正答率は、小・中学校ともに4ポイント以上、全国平均を上回っている。領域別では、小学校では「図形」(A問題)、「量と測定」(A・B問題ともに)、中学校では「図形」(A問題)、「資料の活用」(B問題)で、改善の傾向が見られた。

##### 質問紙

児童生徒質問紙の「学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」ことに対する肯定的な回答は、小・中学校ともに13ポイント以上、全国平均を上回っている。また、学校質問紙の「実生活における事象との関連を図った授業を行った」ことに対する肯定的な回答は、小学校では11.6ポイント、中学校では18.6ポイント全国平均を上回っている。

##### 設問例

【小・A4】単位量当たりの大きさの求め方を理解している。[全国比 +8.4]

【中・A5(1)】空間における直線と直線との位置関係(おじれの位置にあること)を理解している。[全国比 +11.3]

#### 課題

##### 小学校

▲グラフから読み取った情報を根拠に、事象について判断した内容を説明すること

【小・B4(3)】2つのグラフを見比べて貸出冊数を読み取り、それを根拠に、示された事柄が正しくない理由を記述する。  
[正答率 県：33.4%，全国：24.9%]

##### 中学校

▲グラフの傾き等から関数関係を見だし、事象に即して捉え直すこと

【中・B3(2)】車の使用年数と総費用の関係を表すグラフについて、グラフの傾きが表すものを選択する。  
[正答率 県：31.6%，全国：29.8%]

#### 改善に向けて

- ◇目盛りの大きさ等、複数のグラフを比較する際に留意することを踏まえて数値を読み取る学習
- ◇グラフから読み取れる具体的な数値を用いて、グラフから分かることを説明する学習
- ◇グラフから分かることについて、根拠に不十分な点がないかを批判的に考察する学習

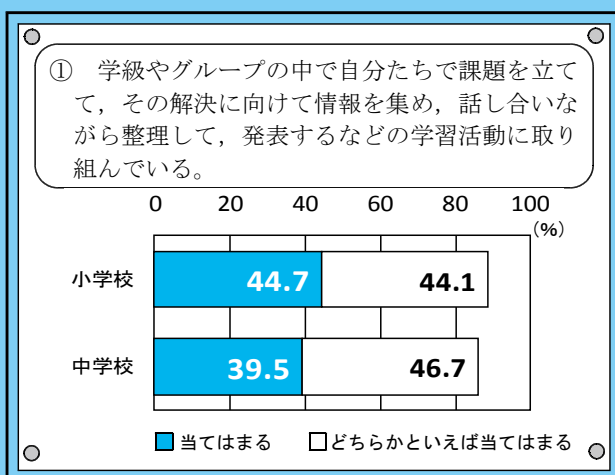
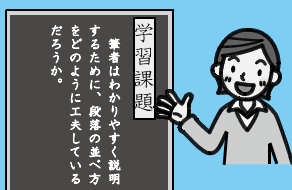
- ◇グラフの縦軸や横軸等を踏まえ、グラフが表すことの概観を捉え説明する学習
- ◇グラフの切片や傾きが表している事柄について分析的に読み取り、事象に即して解釈し説明する学習

### Ⅲ 探究型授業に関する分析

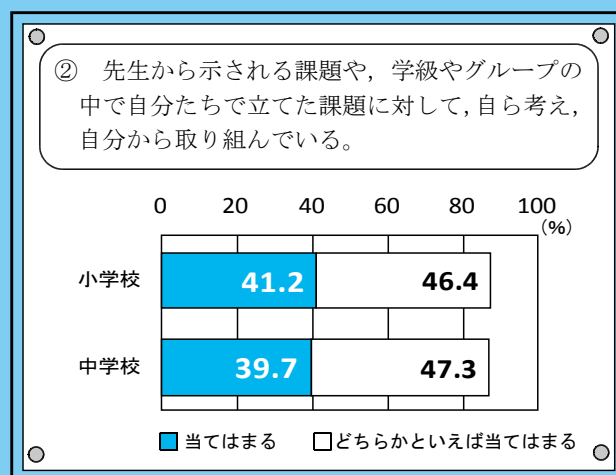
#### 1 児童生徒質問紙調査の結果から見える「秋田の探究型授業」の成果と課題

質問項目の「設定した課題の解決に向けた主体的な活動」「話し合いを通じた考えの深まり、広がり」「学習内容の振り返り」については、肯定的な回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）の割合が、全国より10ポイント以上高くなっています。これは、授業のねらいの達成に向けて、下に示すような「学習の見通しをもつ」「ペア・グループ・学級で話し合う」などの展開を重視した探究型の授業づくりが、各学校で工夫して進められていることによるものです。

#### ● 学習の見通しをもつ

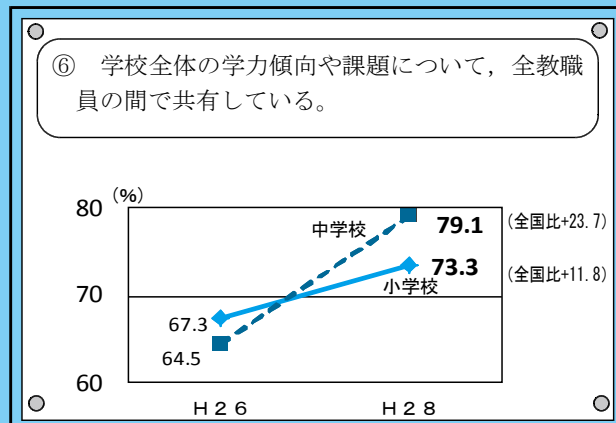
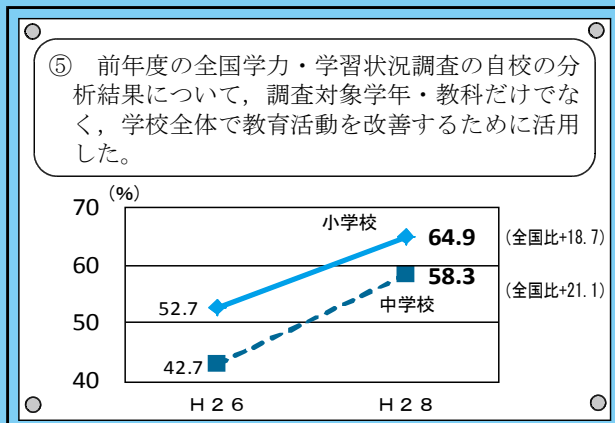


#### ● 自分の考えをもつ



#### 2 学校質問紙調査の結果から見える学校の組織的な取組及び小・中学校の連携についての

学校の組織的な取組に関する質問項目⑤、⑥の結果について、平成26年度のものと比べると、「当てはまる」と回答した割合が増加しており、自校の児童生徒の学力向上に向けて、全教職員の共通理解の下で取り組まれていることがわかります。また、中学校の数値の増加が大きいことから、教科を超えた取組が意図的に進められている様子がうかがわれます。



※グラフは「当てはまる」と回答した割合を表す。

しかし、肯定的な回答のうち、「当てはまる」の割合に着目すると、全国の割合を上回ってはいるものの、30～50%程にとどまっており、一層の向上が期待できる状況にあるといえます。今後は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、これらの学習活動をより一層機能させ、見通しをもって粘り強く取り組んだり、多様な表現を通じて思考を深めたり広げたりすることができるよう、指導の手立てを一層工夫することが大切です。

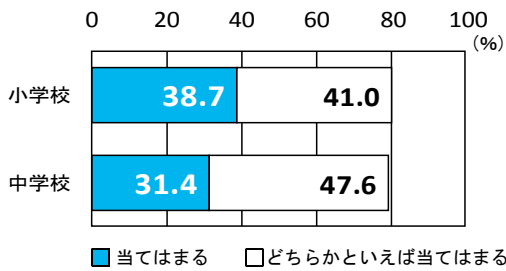
## ペア・グループ・学級で話し合う



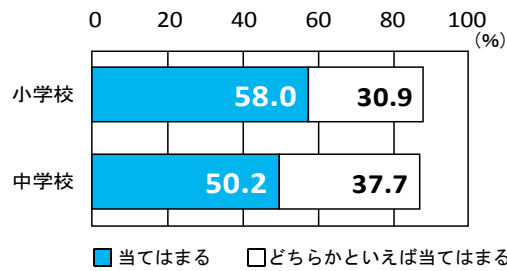
## 学習内容や学習方法を振り返る



③ 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできている。



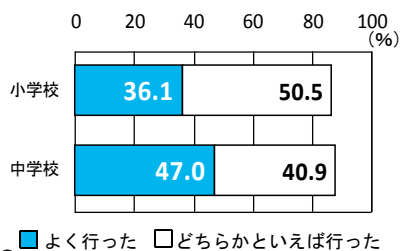
④ 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている。



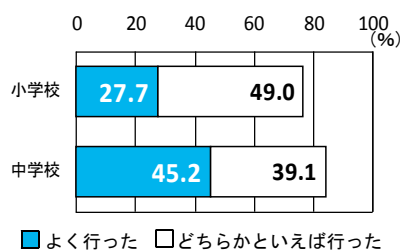
## 成果と課題

小中連携に関する質問項目⑦～⑨の結果について、「よく行った」と回答した割合は、全国とほぼ同程度でした。また、質問項目ごとの割合を比べると、「⑦交流」「⑧授業研究による研修」「⑨教育課程に関する共通の取組」と徐々に低くなっています。今後、学力向上に向けた取組の実効性を一層高めるためには、質問項目⑧や⑨のような視点を持ち、小中連携の内容を充実させることが大切です。

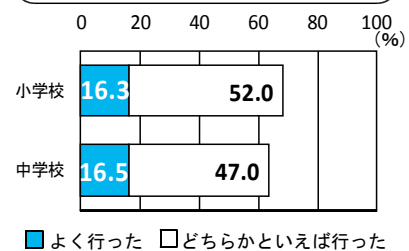
⑦ 近隣等の中学校（小学校）と、意見を交換し合うなど、教員同士の交流を行った。



⑧ 近隣等の中学校（小学校）と、授業研究を行うなど、合同して研修を行った。



⑨ 近隣等の中学校（小学校）と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行った。



## IV 成果につながる取組

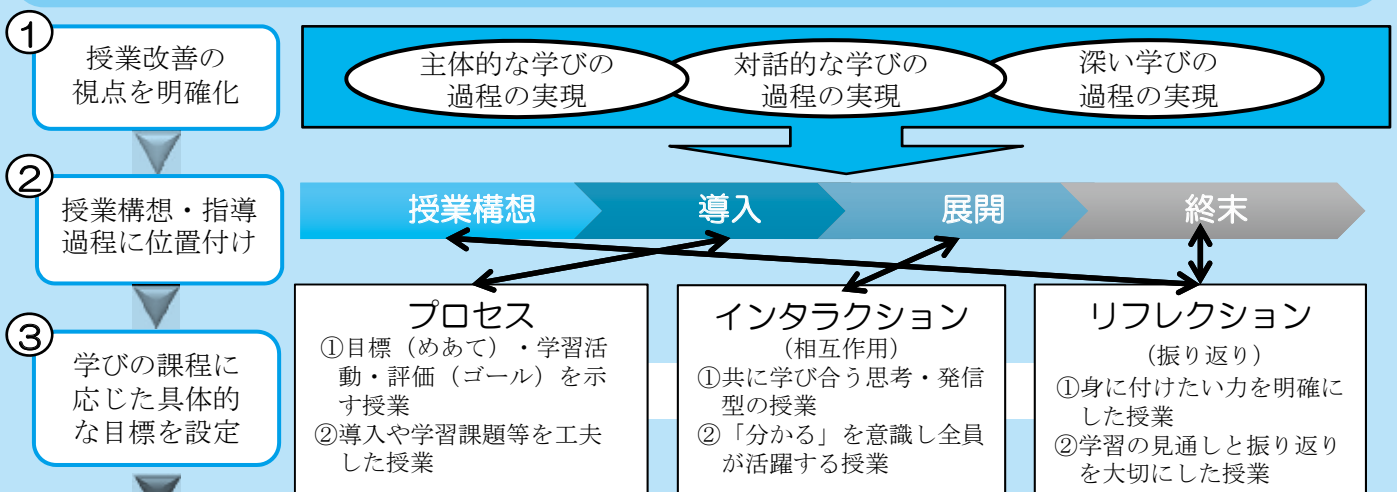
新しい学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組の内容及びその方向性は、これまで本県の各学校で推進されている「秋田の探究型授業」における授業改善の視点と重なっています。このことから、今後、本県の各学校において行われる授業改善の取組については、これまでの実践を新学習指導要領の理念に基づきながらブラッシュアップを図るという視点が必要であると思われます。平成29年度の「学校改善支援プラン」では、そうした観点から、授業改善を進めている事例について紹介しています。

- ①探究型授業の「学びのプロセス」を機能させる取組
- ②教師と児童生徒による「学びに向かう力」を育む取組
- ③「子どもの姿」を核とした校種間連携

### ①探究型授業の「学びのプロセス」を機能させる取組

#### 「学びの過程」に着目した授業改善【A小学校】

【A小学校】では、「論点整理」（教育課程企画特別部会論点整理について（報告）平成27年8月26日）に示された指導方法の見直しの視点を取り入れて、自校の実態に応じた授業改善の3つの視点を設定しています。3つの視点にそれぞれ2つずつのねらい（目指す授業像）を定め、各視点を掛け合わせて（2×2×2）機能させることを意識しています。



#### インタラクション（相互作用）を機能させるための「聴き方・話し方」の資質・能力表

ステップ	聴き方							話し方
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
STEP11	聴いて気付いたことを自分の考えと結び付け(深め)て聴く						☆	話合いの論点に沿って自分の出番を考えて話す
STEP10	自分の考えを深めたり広めたりするために、友達のいい考えなど大事な言葉をメモしながら聴く						☆	結論から述べ、根拠を明らかにして話す
STEP9	自分の考えをいつ話したらよいか、自分の出番を考えながら聴く				☆	☆	☆	日常生活の経験をもとに、例をあげて自分の考えを話す
STEP8	友達の考えの違いを聴き分けながら聴く				☆	☆	☆	友達の考えをくわしく話す
STEP7	聴いた内容について相談する			☆	☆	☆	☆	友達の考えや 意見につなげて 話す
STEP6	友達の言いたいことを分かって聴く			☆	☆	☆	☆	聞く人の はんのうを たしかめながら 話す
STEP5	自分の考えとくらべながら(おなじ・にている・ちがう)きく	☆	☆	☆	☆	☆	☆	わけを つけて はなす
STEP4	ともだちがいったことを じぶんも いえるように きく	☆	☆	☆	☆	☆	☆	言いたいことを じゅんじょよく くぎってはなす
STEP3	はなしを さいごまで きく	☆	☆	☆	☆	☆	☆	みんなに きこえる こえの大ききで はなす
STEP2	うなずきながら(はんのうして) きく	☆	☆	☆	☆	☆	☆	みんなのほうを むいて はなす
STEP1	はなすひとを みて きく	☆	☆	☆	☆	☆	☆	しめいされたら「はい」と へんじをする

インタラクション（相互作用）では、児童が共に学び合うために必要な資質・能力の育成のために、「聴き方・話し方」の資質・能力表を作成しています。発達段階に応じ、また、双方向的な活動を意識した資料づくりは、「伝え合う」力の育成の本質を捉えたものとして大変有効な資料です。

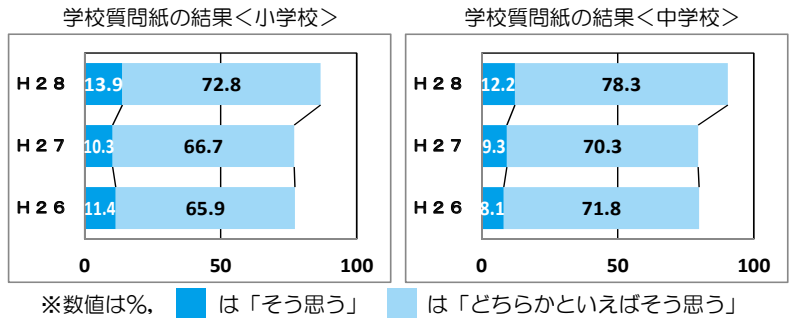
# 重要

## 話し合いで思考を深めることの難しさ

右のグラフは、全国学力・学習状況調査における「学級やグループでの話し合いで、児童や生徒は、考えを深めたり広げたりすることができているか」という学校質問紙の結果を経年比較したものです。

平成28年度の肯定的な回答は、小・中学校とも85%以上ですが、「①そう思う」に限って見ると、その割合は、この3年間でも10%程度に留まっています。学級やグループでの話し合いで思考を深め広げさせるための指導に、更に改善の余地があることが分かります。

話し合い活動における思考の深まりや広がりについての教師の評価



### 思考力を育成する話型の設定【B中学校】

【B中学校】では、思考力を育成するために、授業における話し合いを「思考力・判断力・表現力等の育成」の視点から見直して、話し合いに必要な思考の基本型を「4 thinking」という4つに分類するとともに、その思考の表現に適した「話型」を活用させることによって、育てたい「資質・能力」の獲得を目指しています。

4つの基本話型と育成する「資質・能力」の一覧

話型	4thinking	活用して育む具体的な資質・能力	手立ての例
組立型	はっきりする	<b>組み立てる力</b> ○何が問題で解決すべき課題かを明らかにする力 ○解決までのプロセスを見通す力 ○自分の考えを組み立てる力	条件を制御する
拡散型	広げる	<b>広げる力</b> ○他の方法がないか考える力 ○他の見方がないか考える力 ○他の言い方がないか考える力	多面的に見る
分類型	整理する	<b>整理する力</b> ○比較して区別し、分類する力 ○適否を判断し、選別する力 ○吟味して分析し、評価する力	比較する 分類する
集約型	まとめる	<b>まとめる力</b> ○全体を俯瞰して見る、読む力 ○関係付けて統合する力、調和する力、要約して説明・論述する力 ○新しい価値ある解を生み出す力	関係付ける 規則性を見付ける

研究のための研究で終わらないために

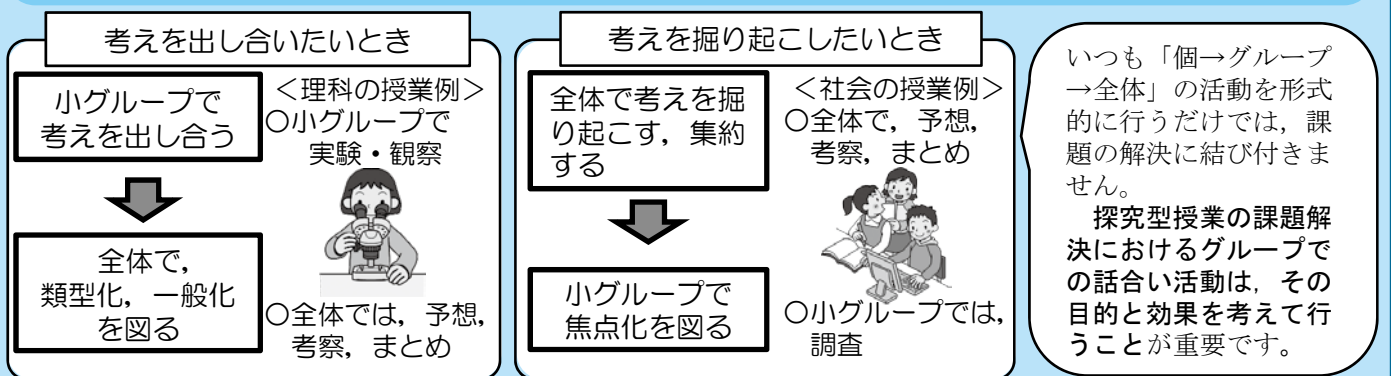
B中学校では、「4 thinking」の共通理解を進めるために、模擬授業の中で、教師自身が話型を使って話し合う場を設定しています。さらに、「3人グループ」での話し合いを導入し、折り合いを付けて話し合うことの重要性を教師自らが体験して理解を深めています。ともすれば、理論研究になりがちな思考力の研究を、体験によって実践的なものにしていきます。



【3人グループ】による話し合いの研修

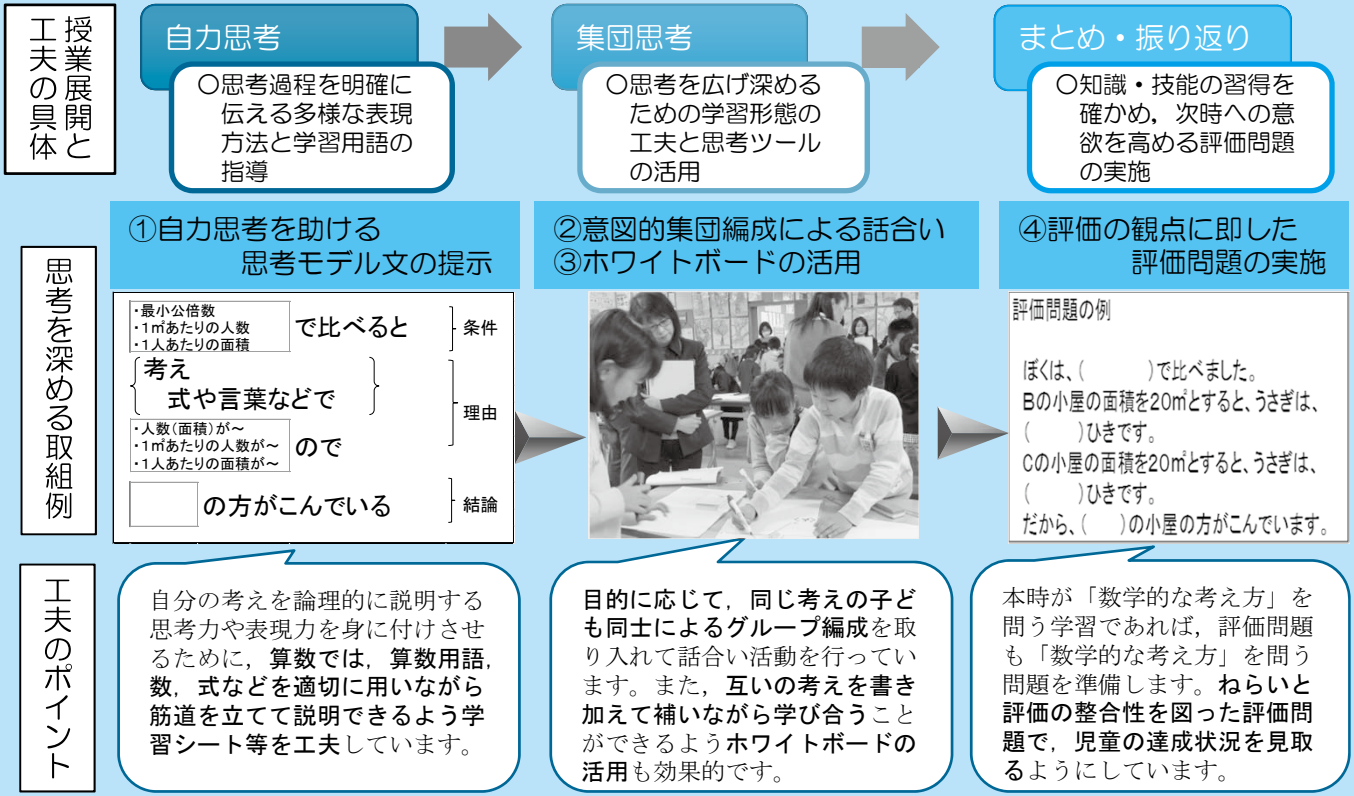
### 話し合い活動の目的に合わせた学習形態の工夫【C小学校】

【C小学校】では、授業における小グループと全体での話し合いを、目的や活動内容の違いを明確化して取り入れ、学習課題の効果的な解決を図っています。



## 論理的思考力を育成する授業構想【D小学校】

【D小学校】は、「『話し合い』を通して思考を深める問題解決型の授業づくり」を研究主題とし、授業展開のプロセスに合わせて思考を深めるための工夫のポイントを設定しています。



## 重要

本誌の2ページに掲載した国語と算数・数学における児童生徒の課題は、「表やグラフなどから必要な情報を取り出し、その情報を根拠にして自分の考えをまとめる」という点で共通しています。取り出した情報を目的に応じて関連付けたり、根拠としての妥当性を吟味したりして、自分の考えをどう論理的に組み立てるかなど、このような視点に基づいて「話し合い活動」を行うことが、今後、本県の児童生徒の「思考を広げ深める」手立てとして必要ではないでしょうか。

## 身に付けた力を自覚させる「単元の振り返り」【E小学校】

【E小学校】では、国語科を重点教科として、「振り返り」場面の充実を図る研究を進めています。一単位時間の振り返りのほかに、単元を通して身に付いた能力を明らかにする「単元の振り返り」を学習に位置付けることで、児童が身に付けた言語能力を実感できるようにしています。

### 【児童の単元の振り返りシート】

**A**

説明文の4つのわざを使うと、読むことができるようになった。①文の構成を考える。②文に合わせた写真を取る。③文と文、写真と文、写真と写真を比べる。④筆者(送り手)の伝えたいことをアツプとルーズで伝えられないことと、伝えられることがあると分かった。

**B**

自分ができるようになったこと4つのわざの一つの「文の構成を考える」と内容が分かり、写真と文を比べることができました。この4つの方法で、自分でも「アツプとルーズで伝える」を参考に勉強でやっていた色々なリーフレットを作ってみました。

**単元の振り返りシートの上段(A)には、その単元で指導する指導事項が、扱う教材に照らしてより具体的にしたものが見られます。下段(B)には、単元に位置付けた言語活動を通しての児童の変容が書かれています。**

E小学校では、こうした振り返りをもとにして、身に付けた力に適切な言語活動の選定や単元計画の改善などについて共同で研究を行っています。

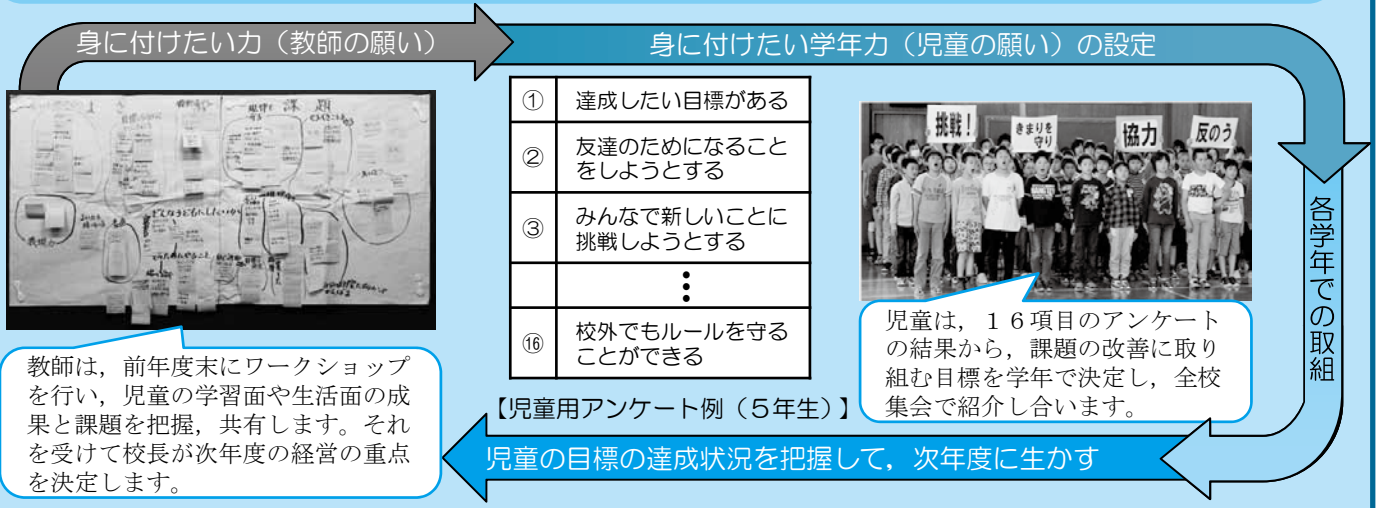
Aには、この単元の学習で身に付けた読み取りの「わざ」を書きましょう。Bには、この単元を通して「分かったこと」や「できるようになったこと」を書きましょう。



## ②教師と児童生徒による「学びに向かう力」を育む取組

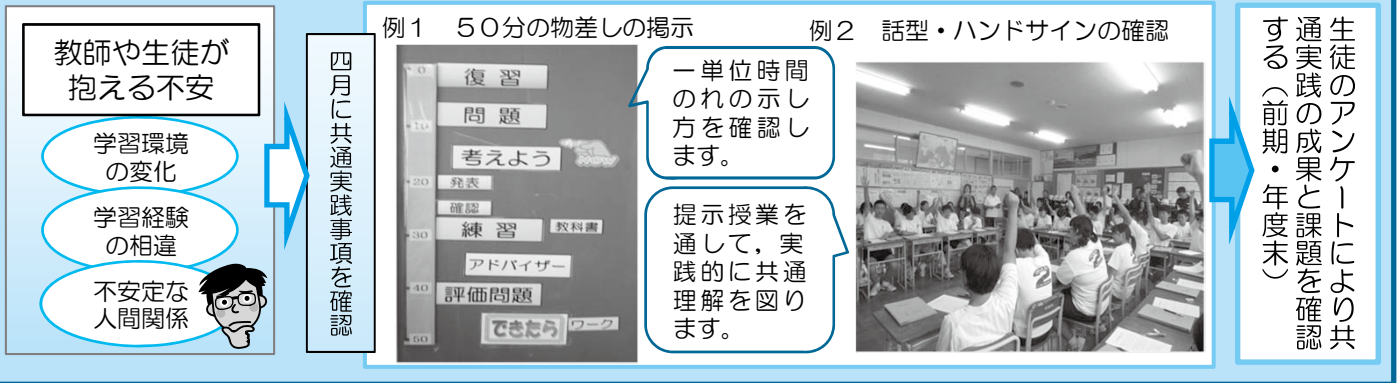
### 学びに向かう力を児童と教師で創り上げる【F小学校】

【F小学校】では、前年度の児童の姿から学校経営の重点を定めています。全校集会や各学級で児童に身に付けてほしい力を明示して、児童と教師が目標達成に向けて取り組みます。児童の実態から目標を設定しているため、児童と教師が一体となって「目指す児童像」に向けて取り組めるのです。



### 学習習慣や学習規律を生徒と教師と一緒に確認【G中学校】

【G中学校】は、近隣の3中学校が統合してきた中学校です。学校の統合に当たり、研究主任が中心となって提示授業を計画し、教師と生徒で学習習慣や学習規律などの共通実践事項の確認を行っています。この実践は、通常の中学校においても、新学期に見られる生徒間や教師間のギャップを解消する手立てとして参考になる実践です。



### 生徒自らが学びに向かう姿勢を問いつける【H中学校】

【H中学校】では、生徒同士による「授業を見合う会」を設定し、自校における理想の「授業像」を生徒自らが考える取組をしています。授業に取り組む目標を「H中生徒スタンダード」としてまとめ、さらにアンケート調査等によって実態を把握し改善を図るなど、生徒自らが学習環境を創り上げる取組として参考になります。



①新1年生が、上級生の授業をうける様子を参観します。



②各学級において授業への取組状況を検討、課題を洗い出します。



③全校で「H中スタンダード」の項目を設定し、その実現に向けて主体的に取り組みます。

【H中生徒スタンダード（一部）】

#### 2 話す

- 話型で話し合いをつなげる ……………
- 伝えることを意識した分かりやすい説明（途中で区切ったり確認したりする）
- 全員発表 ……………
- 注目をさせてから発表 ……………

この実践は、新しい学習指導要領にある「新しい時代に求められる資質・能力」における「学びに向かう力・人間性のかん養」につながる取組として今後の成果が期待されます。

### ③ 「子どもの姿」を核とした校種間連携

#### 就学前教育との連携で学力向上の基盤をつくる【I小学校】

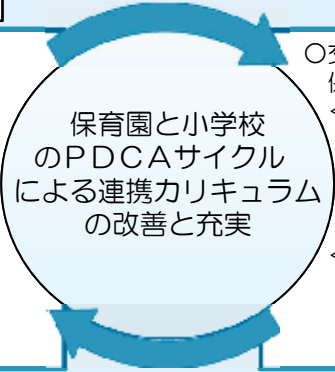
【I小学校】は、新入生の「歯の健康」を目的に、I小学校と学区内の2つの保育園との連絡協議会を設定し、ともに生活習慣の改善に取り組んでいます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「小学校入学段階の姿」が幼稚園・保育園と小学校の教員に共有化されることが、小学校1年生に安定した学校生活を保証することにつながることから、今後ますます就学前教育と小学校教育と接続の強化が注目されます。

##### 保・小連携の具体的な取組

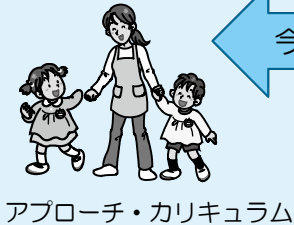
- 年2回の連絡協議会の実施
  - 5月 小学校入学後の様子を参観（保）
    - ・1年間の事業計画作成
  - 3月 連絡協議会及び情報交換会
    - ・交流実践の振り返り
    - ・新年度計画作成
- 園児の小学校行事への参加
  - ・生活科体験、学習発表会見学（10月）
- 保育体験
  - ・夏季休業期間に、小学校の職員全員が、一日、保育園で保育体験を実施する。

##### 保・小連携で育てたい力

- 交流等を通して、身に付けさせたい力や、保・小で共通して取り組む実践事項を決定
  - <育てたい3つの力>
    - ①生活する力...見通しをもった生活をする
    - ②学ぶ力...文字や数に親しむ
    - ③かかわる力...伝えたいことを話し、相手の言葉を受け止める
  - <共通実践事項>
    - ・歯の健康
    - ・しっかり聞こう、自分の言葉で伝えよう
    - ・時間を守って活動しよう（遊ぼう）



今後は、就学前教育と小学校教育の連携カリキュラムの作成へ



今後は、幼保・小が合同でカリキュラムを作成することが望まれます。特に、幼稚園・保育園が小学校のスタート・カリキュラムを参考にして入学段階の児童の姿をイメージしたアプローチ・カリキュラムを作成などの「カリキュラム・マネジメントの視点」が、これからの就学前教育と小学校教育の円滑な連携につながると考えられます。

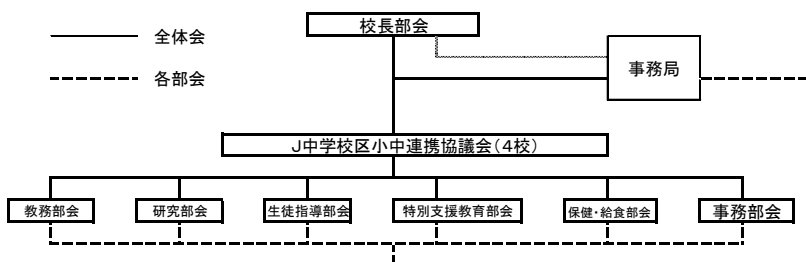


#### 子どもの成長する姿で連携の成果を共有する【J中学校】

【J中学校】が小学校との連携を上手に進めている秘訣は、子どもの姿を通して連携の成果を共有することにあります。次の「母校訪問体験学習」のように、子どもの姿を通して小・中の教員が連携の有効性を実感してこそ、連携体制もより有機的に機能します。

##### 小中連携の取組の一例「母校訪問体験学習」

J中学校では3年生が総合的な学習の時間を活用して母校の小学校に出かけ、出前授業を行います。中学生は、交流を通して充実感や達成感を味わい、授業を受けた児童は、数年後の自分の姿をそこに見だします。また、小学校の教員は、授業を行う中学生の姿に、自校の卒業生のたくましく成長する姿を見ることができま。こうした連携を通して進める取組の成果が共有され、小中連携を一層強固なものにしていきます。



小中連携を束ねる協議会の上に、校長部会を設定し、そこで小中連携の基本的な内容を確認します。それにより、連携にぶれが生じにくく、連携の内容や質がそろっていきます。また、職員全員が部会に所属することで、連携の意識が高まっていきます。

## V 検証改善委員からの提言

秋田県検証改善委員会委員長 秋田大学大学院教育学研究科教授 阿部 昇

### ◆秋田県の先進性がより注目されている—「主体的・対話的で深い学び」としての「探究型授業」

秋田県の子どもたちは、28年度も全国学力・学習状況調査でトップクラスの成果を出してくれました。また、無解答率の低さも例年どおりトップクラスです。この成果には多くの要因がありますが、何と言っても秋田県の先生方の授業力の高さが第一です。特に子どもの主体性と対話性を重視した「探究型授業」を展開していく力量の高さです。

新しい学習指導要領では、総則でも各教科でも「主体的・対話的で深い学び」が前面に出されていますが、秋田県の探究型授業は間違いなくこれを先取りしたものです。「主体的・対話的で深い学び」に関わって指導要領では「主体的に学習に取り組む態度」「協働」「物事を捉える視点や考え方（見方・考え方）」「知識を相互に関連付けてより深く理解」「情報を精査」「問題を見いだして解決策を考える」「言語活動」などが重視されていますが、これは秋田県の探究型授業で既に広く行われていることです。だから、秋田県の子どもたちはA問題だけでなくB問題にも強く、無解答率も低いのです。

ですから、秋田県では「主体的・対話的で深い学び」について、何か全く新しいことを立ち上げるという発想は必要ないと思います。これまで探究型授業を核として広く行ってきた授業づくり、授業研究を、もう一度見直しブラッシュアップしていくという姿勢が大切になると思います。

### ◆「探究型授業」のどこをこそブラッシュアップしていけばいいの

秋田県の授業は全国的にみて先進と言えますが、しかし更に改善の余地はあると思います。例えば、学校質問紙の「児童・生徒は学級やグループの話合いで、自分の考えを深めたり広げたりできている」に「①そのとおりだと思う」と答えた秋田県の学校は、小中ともに10%を少し上回る程度に過ぎません。「②どちらかといえばそう思う」を合わせれば高い率にはなるのですが、「そのとおりだと思う」が割程度というのは残念です。同じ学校質問紙の「児童・生徒は学級やグループの話合いで、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができている」についても「①そのとおりだと思う」は、12～17%程度にとどまっています。

「探究型授業」の特長は、子ども相互の話合い・意見交換で考えが深まり広がり、発見が生まれていく点にあります。この質が上がらない限り、「理解できた」「できるようになった」と見えるような授業でも、実は十分に「見方・考え方」が育っていない、「より深く理解」するレベルにまでは至っていない可能性があります。

先進県の秋田県だからこそ、グループや学級での話合いの質を更に向上させていくための授業づくり・授業研究が求められると思います。グループや学級全体の話合いで何を追究させるか、どういう試行錯誤を生み出させるか、どう発見を生み出させていくかなどについての先生の緻密で鋭い見通しが大切です。そのためには、教材研究に甘さはないか、目標・ねらいが抽象的になっていないか、指導計画が十分練られているか、授業技術に改善の余地はないかなどを、再度見直し点検し直していく必要もあると思います。「グループの人数や編成」「司会（学習リーダー）への指導」「教師の個人・グループ・学級全体への助言・援助」「ゆさぶり」などにも、より丁寧に気を配る必要があります。

### ◆「教科の壁」「学年の壁」「学校の壁」を超えた中身の濃い共同研究を

「主体的・対話的で深い学び」そして「探究型授業」は、下手をすると活動や発言が派手に展開されるだけで、子どもたちの学びが極めて薄いという状況に陥っていきます。その意味でこれらは教師の高い力量が求められる教育方法です。

秋田県で探究型授業が成果を挙げているということは、秋田県の先生方の授業力が高いということですが、それを生み出し支えているのは、優れた共同研究システムです。専門職である教師にとって継続的な研修・研究は必須ですが、秋田県ではそれがかなり実質化されています。校内研修、小中連携、小小連携、中中連携、教育専門監研修、コア・ティーチャー研修、市町村での研修、総合教育センター等の全県規模の研修など多様な研修が、実質的に機能しています。

先生方の同僚性も高い。学校質問紙の「学校全体の言語活動の状況や課題について全教職員で話し合い検討している」に「①よくしている」と答えた秋田県の学校は、小中とも全国平均を20ポイント以上上回っています。

ただ、残念ながら「教科の壁」が先生方の共同研究の広がりを押しとどめている学校・地域もあるようです。学年部での共同研究はあるものの、「学年の壁」を超えられないという場合もあるようです。また、小中連携を望ましい形で研究に生かしている地域がある一方で、小中連携が形骸化している地域もまだあると思います。「教科の壁」「学年の壁」更には「校種の壁」を乗り越え、より豊かで多様な共同研究を創り出してほしいと考えます。

最後に先生方の「多忙化の解消」も是非実現していただきたいと思います。質の高い探究型授業を行うためには、準備の時間・共同研究の時間の保障が必要です。多忙化は、授業の質の低下につながります。実務の肥大化、部活動指導の負担などが先生方の時間を奪っています。教職員の加配、実務の大幅削減、部活動指導の外部委託などを至急進めていただきたい。また、各学校では長く行われてきた様々な行事等の精選も大胆に進めていただきたいと思います。

秋田県検証改善委員会委員 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長 大杉 住子

### ◆「主体的・対話的で深い学び」と秋田の探究型授業

新しい学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点は、これまで我が国で実践されてきた授業改善の蓄積を振り返り、子どもたちが学習内容をしっかりと理解したり、社会や生活の中で必要となる力を身に付けたりすることにつながっている授業には、どのような視点が共通しているのかを議論する中で見いだされてきました。

秋田県が目指している探究型の授業は、こうした「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善そのものです。子どもたちが学習の見通しをもったり、学習内容や方法を振り返ったりできるようにするための工夫、ペアや集団で話し合う場面の設定、「問い」を生かした授業の展開などを通じて、秋田の先生方には、子どもたちの学びの質を見取る目が養われているなど感じさせられました。

秋田県の実践は、よさを継続していくためには不断の改善が必要だということを私たちに教えてくれています。秋田のこれからを支える子どもたちに、未来の創り手となる力が育まれるよう、新しい教育課程においても、これまでの研究成果を生かした取組を継続していただきたいと思います。

### ◆カリキュラム・マネジメントの中での体制づくり

授業改善は、各学校が目指す教育目標とのつながり、学期や年間を通じた中長期の指導計画の中での位置付け、組織的・計画的に改善を図るための校内の体制づくりなど、さまざまな取組によって支えられています。こうした取組を、教育課程を中心に捉え直したのが「カリキュラム・マネジメント」です。

新しい学習指導要領の総則は、カリキュラム・マネジメントの流れに沿って構成されています。是非、この総則を手掛かりとしながら、授業改善に向けた取組をカリキュラム・マネジメントの中に位置付け、より効果的に展開していただきたいと思います。

# 本県の小・中学校のよさを生かし、更に充実・発展させるために

## 一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～

検証改善委員会では、全国学力・学習状況調査のデータを基に、「安定した成果を示している学校」、「課題の改善状況が顕著である学校」がもつ特長から、学力向上を支える関連因子を見付け、それらを「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～」としてまとめてきました。各学校において、この「5つのエッセンス」を、児童生徒の一層の学力向上に活用していただければ幸いです。

### ① 学校体制でPDCAサイクルの確立

効果のある取組を進めている学校では、教科や学年・校種を超えた、教員の共同研究が推進されています。質問紙では、「全国調査等の結果を分析し、教育指導の改善を行っている」「言語活動の課題等について、全教職員で話し合ったり、検討したりしている」などが全国の結果を大きく上回っており、本県が提唱する全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、高校入試を一体と捉えた検証改善システムの充実が進んでいます。

### ② 子どもたちが安心して学習できる環境づくり

児童生徒質問紙では、「自分にはよいところがある」「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦する」などが全国の結果を大きく上回っています。これは子どもたちが前向きで真摯な姿勢であることはもちろんですが、児童生徒のよさや可能性を積極的に評価して、自己有用感をもたせようと工夫を凝らしている本県の教師・学校のきめ細かく温かい学習環境づくりが生み出した結果です。

### ③ 子どもたちの思考を促し深める授業づくり

本県では、児童生徒が問題を発見し、話し合いなど他者との関わりを通して、主体的に問題を解決する探究型授業が盛んです。質問紙調査では「自分たちで課題を立てて、解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの活動に取り組んでいた」「話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」などが高い数値を示しています。今後は、児童生徒の学びという視点で、授業改善を進めていくことが一層求められます。

### ④ 自発的学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に学力を身に付けさせるためには、自発的な学習を促す指導の工夫が大切です。児童生徒質問紙でも、「自分で計画を立てて学習する」「家で学校の授業の復習をする」などが全国の結果を大きく上回っています。今後更なる学力向上を期して、家庭学習の充実に向けた指導、補充的な学習の取組、自ら「問い」をもつことができる子どもの育成などに向けて、全校体制で組織的・継続的に取り組むことが求められます。

### ⑤ 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

学校・家庭・地域等のオール秋田でつくってきたすばらしい教育環境が、本県の教育の強みです。子どもたちの授業への姿勢、家庭学習の充実なども、それと関わりがあります。本県では、学校から家庭や地域への働きかけ・呼びかけが特に丁寧に行われており、学校・家庭・地域の豊かな連携を生み出しています。

## ▶ 学力向上に関する資料

美の国あきたネット(<http://www.pref.akita.lg.jp>)>部署別>教育庁>義務教育課

・学校改善支援プラン ・秋田県学習状況調査 ・秋田わか杉 七つの「はぐくみ」等

平成28年度  
秋田県検証改善委員会

### 委員一覧

※敬称略

職名は平成29年3月現在

阿部 昇	秋田大学大学院教育学研究科教授	赤川 太	義務教育課副主幹兼指導班長
大杉 住子	文部科学省初等中等教育局教育課程課 教育課程企画室長	中井 淳	義務教育課副主幹
稲岡 寛	次世代型教育推進センター研修協力員	上田 満	義務教育課主任指導主事
佐藤 昭洋	義務教育課長	櫻庭 直美	義務教育課主任指導主事
菅原 勉	総合教育センター副所長	羽深 康之	総合教育センター主任指導主事
貝森 逸子	大館市教育研究所長	大山 厚	総合教育センター指導主事
工藤 隆	秋田市教育研究所長	山口 史人	北教育事務所鹿角出張所指導主事
齋藤 浩幸	由利本荘市教育委員会学校教育課長兼 由利本荘市教育研究所長	中田 康広	北教育事務所鹿角出張所指導主事
高橋 玲子	横手市教育委員会教育指導課長	倉田 和人	中央教育事務所由利出張所指導主事
織田羽衣子	由利本荘市立西目小学校長	小坂 浩一	南教育事務所指導主事
佐藤 和広	由利本荘市立西目中学校長	畑 朋幸	義務教育課指導主事
工藤 真弘	義務教育課副主幹兼学力向上推進班長	竹村 竜祥	義務教育課指導主事
		小西 力	義務教育課指導主事
		長門 亮	義務教育課指導主事